2026-2027年度版刊行に際して

2025年という一つの節目が過ぎ，次の節目に向かって国の新たな政策が次々と始まったのが2026年であるといえます．特に社会保障制度の分野は目まぐるしく変化してきて，今までのやり方では病院も医院も薬局も経営を維持していくことが難しくなり，そこで働くスタッフも意識改革をしていかないと，国が求めている医療の質が保てなくなってきています．

特に日本では人口減少問題から生じる課題をどのように取り組んでいくのかという問いかけに対して，その答えの中心にAIの導入ということがクローズアップされています．AIが医療の分野に導入されてくると，医療の専門家と呼ばれている人達はどのように対応することが重要になってくるでしょうか．専門家というのはその分野の高度な知識をもって仕事をしているわけですが，AIが導入されると知識というものは数秒で手に入れることができ，決して高度な知識がない人でも様々な情報を簡単に手に入れることができてしまうのです．別に専門家に聞かなくても済んでしまうということが普通に起きてしまうのです．

例えば自分が服用している薬について知りたければ，AIは瞬時にかなりの情報を処理して答えを導いてくれるのです．効果，副作用，相互作用など医師や薬剤師に聞かなくても教えてくれるのです．ところがそこに示された情報は，決して患者さんや個人の事情を配慮したものではないのは当然です．そうなってくると専門家はAIの示した情報を個別化してその人に合った情報に加工して，それを患者さんに提供する必要が出てくるのです．

そこで，適切に個別化するためにはどのような知識の構築が重要になってくるのだろうかということを考えながら今回の改訂作業を行いました．すなわち表向きの情報の背景に何があるのだろうか．新薬は今まで解決できなかったどんな課題を克服してくれる可能性をもっているのだろうか．既存の薬に対する評価は今はどのようになってきているのだろうか．こんなことを考えながら次のような改訂を行いました．

- 「アレルギー性鼻炎治療薬」「肥満症治療薬」の項目を新たに加えたこと
- コラムとして「認知症とヘルペスウイルス感染は関連性あるの？」「高容量ワクチン『エフルエルダ筋注』」を追加したこと
- 全ての項目について，必要とされる新規医薬品の追加，発売中止の医薬品の削除のほか，診断基準の追加あるいは差し替えなど，情報のアップデートを行ったこと
- ガイドラインを最新のものに変更したこと

また今回初めて私の右腕となり多大なるサポートをしてくださった編集部の井芹早希さんにこの場を借りて感謝の意を述べたいと思います．

今回も同じ言葉で終わるのですが，この本が患者さんのために日々ご尽力くださっている方々の一助となれば著者にとってこんなに嬉しいことはありません．

2026年5月

中原　保裕

初版序

「もし，この世からすべての医薬品が消えてしまったらどうなるでしょうか」．現代医療では，薬は欠くことのできない存在として広く認知されるようになってきました．いままで治療が困難だった病気に対して効果的な薬が次々と開発され，人類に多大なる恩恵を与えてきたことはいまさらいうまでもありません．同時に，薬害や副作用についても関心が高まり，医薬品の使用に際して，いろいろなことを考えたうえで実際に処方を組み立てていくことの重要性が，医師，薬剤師を中心とした医療スタッフのあいだで強く認識されるようになってきました．

また，患者も自分の服用している薬について知りたがる傾向は年々高まり，それに応えるかのように，医師からもらった薬が何かわかる本が，次々と出版されたのです．ところがその内容をみると，患者にとってどれが大切なものなのかということを患者自身では判断しにくい部分もあり，不十分な理解から誤解をしてしまい，薬に対する不安がさらに増大している人も少なくはないのです．このような状態で患者を放置すれば，治療には間違いなくマイナスに働くものと思います．もちろん，医師も患者に薬について説明する努力をしていますが，コ・メディカル，とくにナース，薬剤師もそれに協力していくことが大切です．

ところが，コ・メディカルが薬の話をすると患者のなかには，医師が行った説明とは違う部分があることを指摘する人がいます．もちろん，患者が思い違いをしているケースもありますが，コ・メディカルが十分に処方内容を理解していない状況で話をしてしまったということも，その一因となっているのです．薬一つひとつに関してはある程度理解をしていても，その薬がどうして選ばれたのか，どういう目的で薬を併用しているのかといったことをある程度理解する必要があります．それができればいまよりも内容のある説明ができ，そのことが治療成績を向上する一助ともなるのです．さらに，薬を選択したり投与量を決める際には，いままでの治療経緯や患者の特性を考えることも大切となっています．つまり，「いろいろなことを考えたうえで処方が組み立てられている」のです．

1989年，いまから10年前に学習研究社より出版させていただいた「臨床に生かしたいくすりの話」は，わかりやすさを心がけてつくった結果，医師，ナース，薬剤師，MRを中心に数万人以上の人々に読んでいただくことができました．その読者から「さらに一歩踏み込んだ，臨床に生かせる薬の知識を集めた本がほしい」との声が多数寄せられ，その言葉に励まされて本書が誕生したのです．処方内容をみて，コ・メディカルができるだけ正確に医師の処方意図を理解することができ，よりよい医療を患者に提供できるという結果が生まれることを祈って，本書を世に送り出します．みなさまの日常業務を効率化する一助となると同時に，患者からより信頼される医療を提供するために，広く関係者に利用されることを願ってやみません．

1999年4月

中原　保裕